

## 編集後記

この冬は、近年になく寒さが厳しかった。「地球は寒冷化しつつあるのではないか」という思いが一再ならず脳裏をよぎるほどだった。しかし、つい半年前を思い返せば、去年の夏、その暑さは異常ともいえるもので、「地球はやはり確実に温暖化しているのだなあ」という思いに何度とらわれたことか。

地球は温暖化しているのか、それとも寒冷化しているのか——。この問題の専門家である本学の梶原良道教授（地球科学系）は、（長いスパンで見れば）地球は寒冷化に向かっているという。と同時に、「現時点における将来予測はコイン占いと同等あるいはそれ以下の確度しかもち得ない」とも述べておられる（*Ευρεκα* No.9 筑波大学総合博物館ニュース誌 第9号、平成14年）。たしかに、明日、明後日の天候の予測すらおぼつかないのが人知の現状であってみれば、長いスパンでの地球の気候変動を予測することなど、当分のあいだ我々には望むべくもないのだろう。

人知を超えるのが「自然」というものの有り様だとして、では、自然ならぬ人の世の成り行きはどうなのか。9、11の米同時多発テロは世界中を驚愕させたが、身近なところでは、現在の日本の長期経済不況もはるかに予測を超えていた。この出口なしの状況を、バブル期にだれが予測できただろう。同じく、市場原理の波に洗われる日本の諸大学の現状も——。

さまざまな予想外の状況に直面して、我が筑波大学も変貌を余儀なくされている。だがいったいどういう予測のもとに、どういう対処が可能なのか。

考慮に入れなければならないのは、我々個々人の内に潜む「自然」の存在である。（「囚人のディレンマ」の例を持ち出すまでもなく）我々は理性だけに従って合理的に行動するとは限らない存在である。ときには欲望に誘われ、あるいは利己心に駆られて、つい合理的とはいえない振る舞いをしてしまうのが、悲しいかな人間の性である。大きな組織の改変ともなれば、下部組織の間で利害の衝突が生じ、各組織のエゴが合理的な判断を妨げるといった事態が起こりがちだ。理性人の集合である大学の場合はどうか。そういう事態が生じたとき、これをいかに克服するかも大学改革の重要なポイントであるように思う。

（笹澤 豊）